OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	Essays on Incomplete Market Participation and Risk Sharing
Author(s)	大野, 弘明
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49352
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【18】

氏名	大野弘明（おおのひろあき）
博士の専攻分野の名称	博士（経済学）
学位記番号	第　２２６６１　号
学位授与年月日	平成21年３月24日
学位授与の要件	学学位規則第４条第１項該当 経済学研究科経営学系専攻
学位論文名	Essays on Incomplete Market Participation and Risk Sharing （市場の参加制約及びリスクシェアリングに関する分析）
論文審査委員	（主査） 教授　仁科　一彦 （副査） 教授　本多　佑三　　教授　大西　匡光

論文内容の要旨

本論文は、金融資本市場において参加制約や個別リスクの存在を前提にして、銀行の資源配分機能に関する分析を施し、それらの要因が資産価格及び資本蓄積に与える影響について検討している．

第１章では，完備かつ完全なアロー・ドブリュー経済において達成されるリスクシェアリングの含意から議論を出発し，本論文で焦点となる参加制約の問題，個別選好ショックの問題及びリスクシェアリング機会を供給するメカニズムが複数存在するときに生じる内生的個別賦存ショックの問題（リスクシェアリング外部性の問題）を提示し，その概要を述べている．

第２章では，Diamond & Dybvig (1983)の三期間モデルを世代重複モデルによる動学環境に拡張し，更に個人間の直接金融取引を明示的に導入した下で、社会厚生を最大化するように行動する独占的な銀行の存在が、厚生を改善する可能性についての分析する．参加制約が存在する場合には、個人合理性条件より，参加制約の程度に応じて、銀行は世代内リスクシェアリングの機会を供給しながらも資金を内部留保することが可能になり、銀行の内部資金が世代間リスクシェアリングに貢献し、将来世代のあらゆる個別ショックを除去することを示している．

第３章では，Diamond & Dybvig (1983)のモデルを拡張した、Bencivenga & Smith (1991)の間接金融取引の手段のみ存在する世代重複経済において，個人間の直接取引（直接金融）を可能にした場合に，資本蓄積（経済成長）にいかなる影響が生じるかを分析している．第２章との違いは，競争的に利潤最大化をおこなう銀行を仮定した生産経済である点にある．

第４章では，Lucas (1978)型の無限期間交換経済にリスクシェアリング外部性を導入し，銀行・資産市場への参加比率がどのように決定されるか，また，その場合の資産価格の決定を分析している．第一に“全ての個人が株式市場（又は銀行預金）に参加する均衡”と“銀行預金者と株式市場参加者が併存する均衡”の三つの均衡が存在することを指摘している．第二に，銀行預金者と株式市場参加者が併存する均衡では、内生的個別所得リスクを完全にはヘッジすることが出来ないので、株式市場参加者は保険で対応出来ない将来の所得リスクに備えて予備的貯蓄をおこない，同時に，追加的なリスクを回避するために危険資産よりも安全資産を相対的に需要することを示す．

第５章では，リスクシェアリング外部性を内生的成長モデルに導入し、非市場参加者の存在が経済成長や社会厚生に及ぼす影響を分析している．主な結論として第４章と同様の複数均衡が存在が示される。資本蓄積にスピルオーバー効果が存在するとき，資本の過小蓄積の問題が生じることはよく知られているが，銀行預金者と株式

市場参加者が併存する均衡において，保険で対応できない内生的賦存リスクに対する予備的貯蓄は資本蓄積を促し，スピルオーバー効果による資本の過小蓄積性を相殺することを明らかにしている．即ち，非市場参加者の存在によって社会厚生が改善される可能性を示唆している．

論文審査の結果の要旨

［審査結果の要旨］ 本論文は、リスクの顕在と多様な参加者を前提にして、望ましい金融・資本市場のデザインを追求した研究であり、非常に新しい研究分野に属する。ファイナンス理論を中心とした金融分析と、マクロ成長理論ならびにゲーム理論を駆使した成果は、高い評価を得ている。新しい金融システムの構築に向けた検討課題を明らかにし、その方向性を示した貢献により、本論文は博士（経済学）に値するものと判断する。